「曳家」を体験する越ヶ谷小学校の児童たち

「曳家」を体験

越ヶ谷小児童 蔵を移動

越谷市越ヶ谷に残る江戸時代末期に建てられた蔵が2日、曳家工事で約8㍍移動し、地元の越ヶ谷小学校の3年生107人が作業を体験した。同市の住宅メーカー・中央住宅（品川典久代表取締役）の分譲住宅建設「蔵のある街づくりプロジェクト」の一環として実施された。

同地区周辺は旧日光街道沿いの宿場町で、蔵など歴史的、伝統的な建造物が残っている。しかし、所有者の高齢化や建て替えなどで開発が進み、歴史的な街並みが失われているため、蔵を残す魅力ある街づくりをしようと、同住宅が企画した。

蔵は今から約150年前に建築されたもので、木造2階建てで延床面積48・96平方㍍。屋根は瓦葺き、壁は漆喰塗り。高さは約7・2㍍。内蔵と呼ばれるもので、母屋とつながった構造となっている。

曳家工事は2本のレールの上にジャッキアップされた蔵を8㍍移動させるもの。ワイヤーロープに接続された蔵を現場監督の指示で児童たちがゆっくりと引っ張り、蔵のバランスを取りながら、そろりそろりと移動。約30分かけて移動が終わると、児童から歓声が上がっていた。

畑佐柊磨君（9）は「蔵はとても大きいのに、昔の人はこうやって動かしていたんだと思いました」と感想を話していた。

同プロジェクトは、同蔵の周辺644・51平方㍍を住宅分譲地として開発し、蔵は改修して市に寄贈することにしており、シンボルとして、住民の共有物として活用する。